

春の訪れとともに鮎が遡上を始める。生まれた川に戻るのには、水の匂いを覚えていたからだそう。鮎など川に棲む多くの生き物には海と山を行き来する命のサイクルがある。流れに向かう習性で上流へ進む鮎を治水用堰堤の壁が阻む。それを越えようとジャンプする姿が初夏の風物詩だが、実は上流に困っている姿でもある。



自然の河床から学んだ魚道(上)

山辰組 社長 馬淵和三

る。国交省では平成3年に滞留した。弊社が開発から「魚がのぼりやすい」した魚道は扇形で180川づくり推進事業」を展開。これを機に、西欧式で開。これを機に、西欧式で大型魚対象の従来型魚道が見直された。日本古来の小型魚種に合った魚道の研究開発が全国で進む事となり日本の魚道として著しく進化した。全国で三つのモデル河川の一つに根尾川が選ばれた。木曽川上流河川事務所へは、弊社を含め様々な新魚道が応募された。従来型魚道は壁から下流へ階段状に突き出ていて、先端だけの上り口を先逃して壁まで進んだ鮎は魚道側面の隅で真っ黒へ通う日々が始まった。

度、魚道表面を大小様々の自然石で覆った。減水時に上れる水深を確保するため魚道勾配にも工夫を凝らした。幼い頃から慣れ親しんだ根尾川の自然の河床形状から学んだ魚道だ。様々な応募の中で幸運にも採用頂けた。鮎は新型魚道を上れるのか。ビデオカメラとて、先逃だけの上り口を先逃して壁まで進んだ鮎は魚道側面の隅で真っ黒へ通う日々が始まった。